

園空間に住みつくとと 他者のまなざし

榎 沢 良 彦

はじめに

私たちは、新入園児を早く園に慣れさせようとしません。この「園に慣れる」ということは、「園空間に住みつくと」と言い換えられます。「園空間に住みつくと」とは、自分の家にいるときと同じような在り方で園空間にいられるということです。本稿では、「園空間に住みつくと」がどのようにして可能になっているのかを、具体的な出来事を通して考えようと思います。

一、入園当初の三歳児N夫の姿

三歳児のN夫は入園以来一週間ほど、幼稚園に行くことを嫌がっていました。N夫は園に来て母親から離れようとはせず、担任のY先生も受けつけず、泣いて家に帰りがります。五歳児クラスの兄の所に連れて行けば、N夫は母親から離れてすぐせるのですが、自分のクラスには入ろうとしません。おやつ時間にY先生が誘いに行くと、なんとかクラスに戻るようになりました。

そして、Y先生を拒否しなくなってきました。

場面一 部屋の片づけをするN夫

(一九九六年四月二十日)

きょう、N夫は初めて父親と登園して来た。やはり、緊張した表情ではあるが、帰りがたがって泣くことはなかった。担任のY先生はN夫と親しい関係になろうと、意識的にN夫と一緒に遊ぶようにした。N夫は初めて、自分のクラスの友だちに混じって、砂遊びなどをしてすごした。

片づけの時間になり、Y先生が保育室で他の子どもたちと大型積木を片づけている。N夫はその仲間に加わってはいかないが、そこから少し離れた所で、散乱している小さい積木を拾って片づけようとする。他の子どもたちにはにぎやかに片づけているが、N夫は少し緊張した面持ちである。私はN夫に意識的に近づき、笑顔で「それはここにしまえばいいんだよ」と教えてやる。N夫はそこに積木をしまう。プラスチックブロックを組んで作っ

た物を分解しようとするが、ブロックがはずれない。そこで私が「先生が持つてあげてから引張ってごらん」と言っていると、うまくブロックをはずすことができる。ブロックがはずれるのに合わせて、私が「ボン、ボン」と言うと、N夫は私を見て、嬉しそうに微笑む。

場面二 Y先生と楽しくすごすN夫

(一九九六年四月二十六日)

今朝は、N夫は母親から離れようとせず、母親はN夫とうさぎを見に行くことにした。Y先生が様子を見に行くと、N夫は遠まきにしてうさぎを見ている。Y先生が「うさぎいる？」ときくが、N夫は答えず、一匹のうさぎを目で追っている。しだいにN夫の表情がやわらいでくる。Y先生が顔を隠して、N夫に向かって「いないないばあ」を試みせると、N夫は笑顔になり、二人でそれを三、四回する。

Y先生が保育室に戻るために、N夫に「Nちゃんも一

緒に行く?」ときくと、N夫はうなずく。二人手をつないで戻る途中、会話をする。N夫の方からチューリップを指さして「チューリップ」と言ったり、「さいてる」等と、Y先生に話しかける。

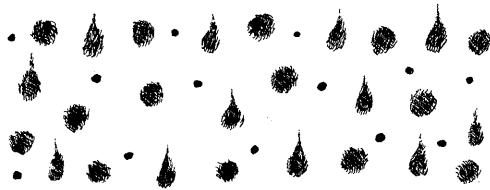
場面三 おやつ時間、私と打ちとけて遊ぶN夫

(一九九六年四月二十六日)

おやつ時間になり、子どもたちは椅子を並べて輪になってすわる。多くの子どもたちはおしゃべりをして、元気に動いているが、N夫は無表情で椅子にすわる。私は意識的にN夫のすぐ後ろにすわる。Y先生と子どもたちは立ち上がって、アニメの主題歌を身振りをまじえて歌う。N夫はそれに乗って、いけず、すわったままである。そこで、私は彼の側で、笑顔で手拍子をしてみせる。すると、N夫は私の方に振り向き、見ている。やがて、笑みがこぼれてくる。歌が終わるころには、N夫の表情はすっかり柔かくなる。

いよいよおやつ。N夫は菓子をもろうと、私に見せ

る。菓子を食べ終えた子は、Y先生に牛乳をもらって飲んでいいる。私が「Nちゃんも牛乳もらっておいで」と促すと、N夫は席を立ってもらってくる。牛乳を飲み終えた子どもたちが数人私の所に来て、洗ったコップを見せたりして、私と遊ぶ。その子どもたちの中に、N夫もいる。そして、彼も他の子どもたちと同じように、空になったコップを私に見せる。私が「Nちゃん飲んじゃったのじゃ、洗ってこよう」と言うと、N夫は洗いに行く。N夫がうがいを始めたので、私が真似をしてみせると、嬉しそうに笑う。



二、園空間におけるN夫の在り方の変容

〔場面一〕で、N夫は緊張してはいましたが、泣くこととはありませんでした。このことは、保育室が少なくとも、「逃げ出すべき空間」から「踏みとどまれる空間」になりつつあることを意味します。それゆえ、N夫は兄の所に行かず、クラスの友だちの中に混じって遊ぶことができたのです。N夫が実際に保育室にとどまることを可能にしたのは、Y先生が意識的にN夫についていたことです。したがって、N夫はY先生の能動的なかわりを受け入れるようになっていえると言えます。

ところが、片づけが始まったとき、N夫は、他の子どもたちと同じように、Y先生と片づけようとはしませんでした。つまり、この日、N夫はY先生とかかわり合ったとは言え、Y先生が「まだ自分から近づいてはいけな存在」だったと言えます。しかし、N夫は離れた所ですら積木を片づけ始めました。N夫は、みんなに加わって一緒に片づけをすることはできないけれど、みんなと

同じように片づけをしようという気にはなっています。それは「N夫が友だちを肯定的な存在として意識するようになっていいる」ということを意味します。

緊張した面持ちで片づけを始めたN夫に私が話しかけると、N夫は私の指示に従ったり、私のおどけた声に思わず笑みを見せたりしました。私がN夫と接したのはこの日が初めてでした。N夫は見ず知らずと言ってもよい私からの働きかけを受け入れたのです。このことからわかるように、「N夫は保育者と一緒に遊べるようになってきている」と言えます。友だちへの態度も考慮すると、「N夫は他者を肯定的な存在として受容しつつある」と言えます。

〔場面二〕では、N夫はY先生の「遊びへの誘い」に対し、即座に笑顔で応えました。つまり、N夫は自らY先生にかかわるという姿勢をとったのであり、そのことでY先生と「同等の遊び仲間」になったのです。その後、N夫は何の抵抗もなく、自分からY先生に話しかけるようになりました。このときには、N夫から緊張感は

消失し、Y先生と共にいること自体を楽しく感じるようになっていきます。N夫は、保育者からの働きかけを待つという「受動的な在り方」から一歩踏み出し、自ら保育者に働きかけるという「能動的な在り方」になりつつあります。

こうして、N夫は他者の存在を肯定的に受容するようになってきましたが、他の子どもたちに関しては、まだ直接かかわり合える存在とは感じていません。「場面三」では、保育室でN夫はみんなの中に混じっていました。しかし、他の子どもたちが楽し気であるのに対し、N夫は無表情でした。つまり、N夫はみんなの中にながらも、孤立して存在していたのです。「場面二」では、N夫はY先生と親しくなることで園空間に住みつくことができていました。ところが、この「場面三」では、N夫は孤立しているゆえに園空間に住みつけていません。それは、Y先生がクラスの子どもたち全員を相手にしており、特別N夫にかかわってくれているわけではないからです。保育者が個人的にかかわってくれると

き、子どもは「よそよそしい空間」の中で、△投錨点▽を手にすることができのですが、N夫にはこの△投錨点▽がないのです。

ところが、私がN夫の側に行き、笑顔に向けて手拍子を打つというように、個人的に働きかけると、N夫は私に興味を示し、笑顔を見せました。そして、N夫と私との間に直接的なやりとりが生じました。二人は互いに笑顔を向け合い、楽しさを感じ合っていますから、容易にふざけ合うこともできます。つまり、N夫と私は「遊び仲間の関係」になっています。

N夫が「無表情で緊張した在り方」から「やわらいだ遊び的な在り方」に変わったのは、私の個人的な働きかけがあったからです。N夫は「共に遊ぶべき具象的個別的な他者」、つまり、園空間に住みつくための△投錨点▽を見出し出したのです。

私の側で牛乳を飲んでいるN夫は、私と遊んでいる子どもたちの仲間に入ってはいませんが、もはや「孤立した存在」ではありません。彼には遊び相手としての私が

存在しています。その私か他の子どもたちとかかわり合っている、彼が望むときにはいつでも私が彼に働きかけたり、応答することを、N夫は信じているのです。

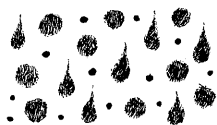
他の子どもたちと私が「遊び仲間の関係」にあるのと同様に、N夫も私と「遊び仲間の関係」にありますから、

N夫は他の子どもたちと同じ在り方をしているとさえ言えます。それゆえ、N夫と他の子どもたちが直接かかわることがなくても、N夫だけ「孤立している」という感じは受けません。明るい表情のN夫が、私と他の子どもたちのやりとりを見ていたり、彼らと同一ような仕方私にかかわってくることからわかるように、N夫は他の子どもたちの中に「溶けこんでいる」のです。

三、園空間への住みつきと他者

きと他者

N夫は徐々に園空間に住みつきけるようになってきました。そ



れは単に園空間を見知ったからではありません。園空間への住みつきを可能にしたのは、他者の意味が変容したことです。

〔場面三〕で、保育室に子どもたちが集まっているとき、N夫は他の子どもたちから孤立している在り方をしていました。N夫は確かに他の子どもたちの中に存在していますが、彼らと「個別的な人格」として交流してはいません。N夫は他の子どもたちを意識していますが、彼らの方はN夫に個人的な関心を向けているわけではありません。つまり、N夫の周囲の他者は彼に対して、「無関心な一般的な他者」として存在しているのです。このような、「一般的な他者」として現れている他者たちの中に存在するとき、子どもはその空間に住みつきことができず、「根なし草」「浮き草」のように漂うこととなります。

ところが、N夫はやがて、笑顔になり、生き生きし始めました。それは、私がN夫に直接働きかけたからです。このとき、私という他者は、N夫にとって「一般的

な他者」ではなく、自分に特別な関心を向けている「個別的な人格としての他者」。「個別的で固有な存在としての他者」です。逆に、私にとってもN夫は、私が特に彼に関心を向けている以上、他の子どもたちとは区別された「固有な存在」です。

このように、子どもと保育者の双方が、共に「個別的で固有な存在としての他者」に出会ったとき、子どもは△投錨点▽を手に入れ、その空間に住みつくことができると同時に、それは、子ども自身が「固有な存在」として生き始めることでもあります。

四、他者のまなざし

子どもが園空間に住みつくためには、個別的で固有な存在としての他者に出会うことが必要ですが、それは「他者とまなざしを向け合う」という仕方で起こりません。例えば、「場面一」では、私はN夫に笑顔を向けて話しかけ、やがてN夫も私を見て微笑みました。「場面二」では、Y先生がN夫に「いないいないばあ」をして

みせることで、N夫がY先生に笑顔を見せました。「場面三」では、N夫の側で手拍子をしている私を、N夫が振り向いて見て、笑顔を見せました。どの場面でも、N夫と保育者がまなざしを向け合うことが起きています。

ところで、N夫の在り方の変化を注視してみると、「他者とまなざしを向け合うこと」は単純なことではないことがわかります。N夫は、入園時からしばらくの間、母親から離れず、Y先生が優しくかかわろうとしても拒否していました。つまり、N夫は、Y先生という「個別的な存在のまなざし」を受け止められなかったのです。Y先生が「固有性」を感じさせず「一般的な他者」として存在している分には、N夫は母親と共に何とか園空間にとどまれていることができたのです。

子どもにとって、園内の他者は、まずは「一般的な匿名的な他者」「疎遠な存在」として現れます。その他者が「匿名性」を保持していれば、子どもは何とかその空間に混じっていることはできます。ところが、この他者が「匿名性」を脱ぎ捨て、「固有性」を際立たせて近づい

てくると、もはや子どもはそこに踏みとどまることが困難になってきます。つまり、他者がいまだ親しい存在でない場合、その他者から個別的なまなざしを向けられると、それと向き合うことができず、緊張し、萎縮してしまふのです。

N夫はしだいにY先生と親しくかわるようになってきました。すると、N夫は他者（Y先生や私）から個別的なまなざしを向けられることに喜びを感じるようになってきました。「場面三二」で、私が側に行つてかわつたことで、N夫が喜んだことからわかるように、「他者にまなざしを向けられること」がN夫の「孤立感」を消滅させ、「他者への親密感」を生じさせています。

こうして、他者が「親しい存在」になるに伴い、他者のまなざしは子どもに緊張と不安を与えるのではなく、存在を支えてくれるものとして、子どもに安心感を与えるようになります。疎遠な他者が「匿名性」の内に「一般的な他者」として現れる場合、子どもはそのまなざし

と向き合いませんから、「園空間に混じる」という仕方とどまることができます。他方、他者が「親しさ」と共に「固有な存在」として現れる場合、子どもはそのまなざしと向き合うことができ、「園空間に住みつく」ことができます。

ところで、「他者が親しい存在になること」と「他者のまなざしと向き合うこと」は因果関係にはありません。両者は表裏一体をなしているものであり、相互规定的な関係にあります。この「相互規定性」こそが、実存する子どもと保育者のかかわりの特質なのです。

（富山大学）